

奈良県内に来る渡り鳥や漂鳥はなぜ奈良に来るのか

中3—D—34 松尾 笑未里

目次

はじめに

第1章 観察方法

第1節 観察方法

第2節 観察場所

第2章 夏鳥について

第1節 夏鳥とは

第2節 どうやって奈良に来るのか

第3節 夏鳥の繁殖

第4節 越冬地への渡り

第5節 第2章のまとめ

第3章 冬鳥・漂鳥について

第1節 冬鳥・漂鳥とは

第2節 どうやって奈良に来るのか

第3節 冬鳥・漂鳥の生活

第4節 第3章のまとめ

第4章 まとめ

おわりに

はじめに

私は小さい頃から生物が好きで、小学3年生の頃に家の電柱に留まっていたイソヒヨドリをきっかけに鳥類が好きになった。そのため、晴れた日に家の近くの公園や山でよくバードウォッチングをしている。公園中を歩き周り、疲れはするものの、見たい鳥に出会えた時の喜びは忘れられない。また、1度見たことのある鳥でも綺麗な鳴き声や姿を見たいと思ってしまう。私はバードウォッチングを始めて、図鑑でしか見たことがなかった様々な鳥類に出会うことが出来た。第1章に出てくるキビタキもその鳥類の1つだ。私は色々な鳥に出会っていくうちに、奈良県にはたくさんの種類の鳥類がいることを知り、とても驚いた。そうした過程で私は「奈良県内に来る渡り鳥や漂鳥はなぜ奈良に来るのか」ということに疑問を持ち調べたいと思った。

第1章 観察方法

第1節 観察方法

私は課題研究ジュニアをするために、やろうと思っていることは、主に公園や山でのバードウォッチング、そして、それらの記録をまとめる作業である。始めにバードウォッチングをするための手順を説明する。1つ目は、渡り鳥が来る場所を探すこと。場所の探し方はバードウォッチャーが撮った鳥の写真を載せているブログまたは見たい鳥の見られる場所を検索するなどの方法である。2つ目は持ち物の準備。私がバードウォッチングをする為に必ず持っていく物は、双眼鏡とカメラ、スマホである。それ以外の持ち物としては、季節に合わせた対策グッズ、例として帽子や手袋、虫除けなどだ。鳥類の探し方は、基本、鳴き声である。しかし夏の時期は、セミの鳴き声がうるさく鳥の鳴き声を聞くことが極めて困難だ。そういった時は目で探すしかない。鳥を見つけたら、双眼鏡で見るまたはカメラで写真撮影をする。写真は全て自分で撮ったものである。私はその鳥を判別することに精を出しているから見つけたら双眼鏡で覗くことの方が多い。またスマホを持っていく理由は、確認できた鳥類の記録を取る為である。記録の取り方は、よく観察している場所では鳥を見た直後に見た場所の写真を撮り、LINEのKeepメモに撮った写真と見た鳥の名称や様子を記すという方法を行っている。そうすることで見た鳥の日時を明確に把握することができる。LINEのKeepメモの記録を分かりやすくデータ化して課題研究ジュニアに役立てている。

第2節 観察場所



Google マップ

- 大阪城公園：大阪府大阪市中央区大阪城にある都市公園。(●)
- 馬見丘陵公園：奈良県北葛城郡広陵町から河合町にかけて広がる都市公園。主に鳥の観察を行う場所は南エリアである。(●)
- 春日原始林：奈良県奈良市の市街地の東方に位置する。(●)
- 大台ヶ原：奈良県と三重県の県境に位置する。標高は約 1695m。(●)
- 奈良学園：奈良県大和郡山市に位置する私立中高一貫校。(●)

私は課題研究のために上記の場所でバードウォッチングをした。地図上には、場所の説明後に記した点と同じ色の点で位置を示している。

第2章 夏鳥について

第1節 夏鳥とは

夏鳥とは東南アジアなどの南の方面から春から夏に日本に渡ってきて繁殖をし、秋には東南アジアなどの南の方面に渡る鳥のことである。

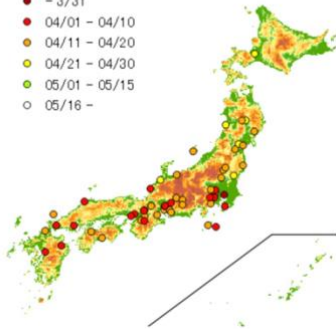
第2節 どうやって奈良に来るのか

・全国的に見た夏鳥の渡り

オオルリ

オオルリの記録徐々に増えています。北海道でも野幌で見られています。

- - 3/31
- 04/01 - 04/10
- 04/11 - 04/20
- 04/21 - 04/30
- 05/01 - 05/15
- 05/16 -



キビタキ

住宅地の公園でも渡り個体の声がたくさん聞かれるようになってます。そろそろ渡りもピークかもしれません。北海道でも記録されました。

- - 3/31
- 04/01 - 04/10
- 04/11 - 04/20
- 04/21 - 04/30
- 05/01 - 05/15
- 05/16 -

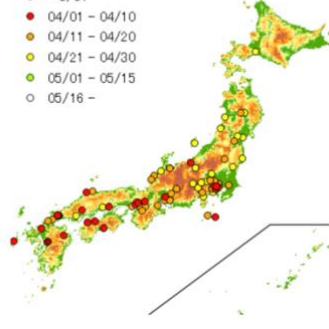


図 1

上記の図 1 はバードリサーチ季節前線ウォッチ 2024 から引用したものである。濃い点が日本で早い時期から見られた地点を示していて、北の地方ほど遅く見られたと確認されている。そしてこの 2 つの図の共通点はどちらも九州に始めに渡ってきて、標高の低い場所や海の上を通ってある地点から内陸部に進出していること。これより私は、海なし県の奈良県にはある地点を中継地として夏鳥が渡ってきているのではないかと考えた。

・大阪城公園

私は図から大阪城公園が瀬戸内海を渡り終わったすぐにあること、そして、野鳥ブログから大阪城公園などから夏鳥の中継地として奈良県に来ていると推測した。推測が正しければ大阪城公園にはたくさんの種類の夏鳥が渡ってきて、短くて 1 日ほどで去るはずだ。これから根拠を説明する。

4 月 15 日 キビタキ、オオルリ、クロツグミ、コマドリ、ヤブサメ、(アカハラ)

5 月 3 日 コルリ

5 月 6 日 サンコウチョウ

* かっこで書いている部分はその日確認されているが私は見る事が出来なかった鳥

図 2 2024 年に大阪城公園に行って確認した夏鳥

(根拠1)

私が大阪城公園に行った4月15日にはキビタキ数十羽とオオルリ14羽が群れで来ていた。基本的にそれらの鳥は単独行動をするため、群れを作るということは渡りの最中以外にない。また図2で載せたほぼ全ての鳥が、1日から3日ほどで大阪城公園を去って別々の繁殖地へと向かっている。

(根拠2)

次のページの図3から大阪城公園にはたくさんの種類の夏鳥が渡ってきていると伺える。5月2日の記録から分かる通りサンコウチョウは次の日には見られなかった。多くの夏鳥は数日間過ごしてから大阪城公園を去っている。

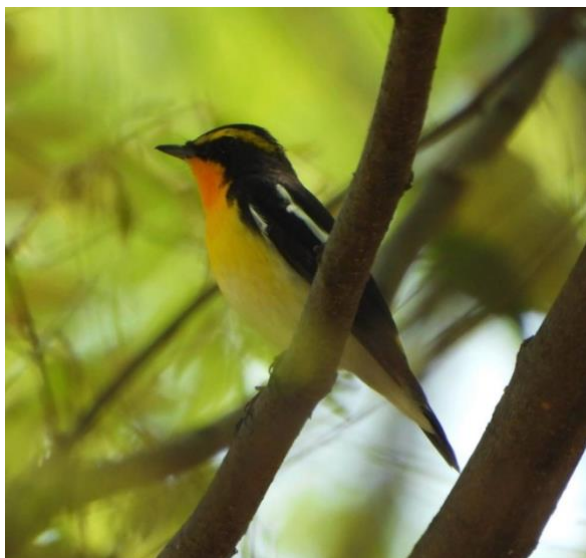
	オオルリ	キビタキ	クロツグミ	コマドリ	コルリ	アカハラ	サンコウチョウ	セキレイ	エゾムシクイ	ヤブサメ	コサメビタキ	サメビタキ	ヨタカ	サンショウクイ	アカショウビン	マシジロキビタキ
4月4日	○															
4月5日																
4月6日	○			○												
4月7日	○			○		○		○								
4月8日	○	○														
4月9日																
4月10日																
4月11日		○	○	○												
4月12日	○															
4月13日	○	○	○	○				○								
4月14日	○	○		○		○		○						○		
4月15日	○	○	○	○		○										
4月16日		○				○										
4月17日		○		○						○						
4月18日																
4月19日	○	○		○	○	○										
4月20日	○	○				○		○	○							
4月21日						○										
4月22日		○														
4月23日																
4月24日																
4月25日		○	○					○			○					
4月26日		○						○								
4月27日						○										
4月28日						○				○						
4月29日					○											
4月30日																
5月1日																
5月2日							○									
5月3日		○			○											
5月4日		○						○								
5月5日		○														
5月6日																
5月7日							○									
5月8日													○			
5月9日							○									
5月10日							○				○					
5月11日		○			○		○									
5月12日		○														
5月13日																
5月14日								○				○				
5月15日																
5月16日																
5月17日		○														
5月18日																
5月19日		○														
5月20日																
5月21日																
5月22日																
5月23日		○														
5月24日																
5月25日																
5月26日		○														
5月27日																
5月28日																
5月29日																
5月30日							○									
5月31日																
6月1日							○									
6月2日															○	
6月3日																
6月4日																
6月5日															○	
6月6日																
6月7日																○
6月8日																○

図3 大阪城公園に渡ってきた夏鳥一覧（全てではない）

根拠1と根拠2から大阪城公園は夏鳥の中継地となっている。そしてそれらの夏鳥は奈良県に渡ってきているのかもしれない。

第3節 夏鳥の繁殖

・キビタキ



オス



メス

分類：スズメ目ヒタキ科キビタキ属

全長：13.5cm

分布：夏鳥または留鳥でほぼ全国

生態：平地から山地の林に生息。林内の枝に留まり、葉や枝にいる虫や空中を飛んでいる昆虫を捕る(フライングキャッチ)。秋の渡りには木の実も食べる。朽木の樹洞に巣を作って子育てをする。

〈馬見丘陵公園〉

私はよくバードウォッチングをしに馬見丘陵公園に行く。そこでのキビタキの様子を書こうと思う。まず始めに結論から言うとキビタキは繁殖していると考えられる。その根拠は次の通りである。

(根拠1)

私は馬見丘陵公園を調査をしている時に色々な場所でキビタキを見たり、鳴き声を聞いたりした。そこで私は見た場所や鳴き声を聞いたりした場所を記録している。。おおよその数としては6羽くらいいると思われた。その結果分かったことは、キビタキのオスのいる場所が繁殖期に作る縄張りの大きさ（直径100m～150m）に一致していたことだ。ここから、キビタキは繁殖に備えた準備をしていると考えられる。

(根拠2)

私はキビタキが虫を食べているところを見たことがあり、馬見公園にいるほとんどのキビタキは高い木（落葉広葉樹林）の近くで見られた。よって、馬見公園には生息環境が整っていると考えられる。

(根拠3)

私は8月15日付近にキビタキのメスを見た。日本から東南アジア付近に渡るために立ち寄ったとしては少し早いと考えられ、おそらく、馬見公園で繁殖したからこの時期に見られたと思われる。

(根拠4)

過去の馬見公園の探鳥会（日本野鳥の会などが主催している）の記録では、キビタキの繁殖が定着してきたのではという記述されていた。今年も繁殖している可能性は十分あり得ると思う。

上記より私は、キビタキが馬見公園で繁殖していると考えている。繁殖している理由は大きく2つの要素

- ① 針広混交林が広がっていて、主食である虫もいる。キビタキの繁殖に適する生活環境が整っていること。
- ② キビタキのオスが繁殖のために縄張りを築き、オス同士で争うくらいキビタキの

メスもいるということ。つまり、キビタキが渡りやすい位置に馬見公園があるということ。

だと考える。

〈生駒市付近〉

この場所ではキビタキの幼鳥を確認した。また、キビタキを複数羽確認したことから、見た個体以外にも幼鳥はいると考えられる。この場所でキビタキが繁殖している理由は大きく2つの要素

- ① 針広混交林かつ高い木が多く、虫も多い。キビタキの繁殖に適する生息環境が整っていること。
- ② たくさんの種類の夏鳥が確認できていることから、夏鳥の渡りルート上にある。または、繁殖地として夏鳥が認知している。

だと考える。

※ この場所ではたくさんの種類の夏鳥の繁殖が確認されており、夏鳥の繁殖に支障をきたさぬよう場所はあえて控えている。

・サンコウチョウ



巢に乗っているオス

分類：スズメ目カササギヒタキ科サンコウチョウ属

全長：♂44.5cm（繁殖期の時期のみ）♀17.5cm

分布：夏鳥。北海道では迷鳥。

生態：平地から山地のヒノキ科やスギ科がある林で、近くに河川や沢、池などの水場がある場所を好んで生息する。つがいで縄張りを持って生活し、林内を飛び周って枝先にいるガ類などを停空飛行して捕える。鳴き声が「ツキ（月）、ヒ（日）、ホシ（星）、ホイホイホイ」と聞こえるから三光鳥と言われる。また、オスの尾羽は繁殖期の間は長く、その後抜け落ちる。

〈生駒市付近〉

この場所ではサンコウチョウが5月の初め頃に来て、巣と托卵している様子を確認した。その情報については見ていた場所で偶然出会った野鳥の会の関係者に教えてもらった。毎年複数のサンコウチョウが繁殖しているらしく、私も6月16日に複数の個体がいることは把握できた。また昨年は見やすい場所に巣があったため、サンコウチョウが子育てしていることがSNSに投稿されてしまったらしく、繁殖を撮影するためにバードウォッチャーが殺到して、繁殖を途中で辞めてしまったらしい。

私が観察に行った日は6月1日、8日、16日、22日、7月9日である。6月1日時点ではサンコウチョウは観察していた場所の近くを飛び回っていた。6月8日、16日、22日では巣の上にいる様子を確認した。子育てはオスメス両方で行っており、約30分起きぐらいに巣の上を交代していた。7月9日にはもうすでにサンコウチョウの鳴き声も聞こえず、巣にもいなかった。幼鳥は確認できなかったため、繁殖が成功しているのかは不明である。繁殖が成功していることを切に願うばかりである。

観察から私はサンコウチョウが繁殖している理由は大きく2つの要素

- ① スギ科などのサンコウチョウが巣を作りやすい木がたくさん生えている。虫も多い。サンコウチョウの繁殖に適する生息環境が整っていること。
- ② たくさんの種類の夏鳥が確認できていることから、夏鳥の渡りルート上にある。または、繁殖地として夏鳥が認知している。

だと考える。

・アオバズク



成鳥



幼鳥

分類:フクロウ目フクロウ科アオバズク属

全長:27~31cm

分布:夏鳥、または留鳥。ほぼ全国。

生態:平地から山地の林、神社仏閣の杜、屋敷林などにこの環境に生息。1羽またはつがいで生活する。日中は暗い林内や樹洞などで休息し、夕暮れから活動しはじめる。主に昆虫類を捕り、カエルや小鳥なども食べる。

〈桜井市内〉

この場所では、アオバズクの幼鳥3羽と親鳥2羽を観察した。観察に行った日程は7月18日、19日、20日、27日である。日が昇っている時間に行っていたためか同じ木の近くに止まっていてとても観察しやすかった。木は高くある程度の太さがあった。またその木には巣が作られていたらしく、巣立ちはしたもののまだ飛べない幼鳥はその木の近くにいた。羽が生え変わりつつあって、飛ぶ練習をしている様子も見ることができた。観察した場所の周りには田んぼや畑があり、狩には困らないだろうと考えられる。そして、27日の3日前か2日前、もしくはその前日の朝にアオバズクはその場所を去ったと考えられる。

観察から私はアオバズクが繁殖している理由は大きく2つの要素

- ① 田んぼや畑などの狩りがしやすい場所があり、幼鳥が巣立った後でも生活ができる環境が整っていること。
- ② 長年その場所で繁殖していることから、繁殖地として認知されていること。

だと考える。

※この場所では100年以上前からアオバズクが繁殖していて、繁殖に支障をきたさぬよう場所はあえて控えている。

・その他

〈オオルリ〉

7月15日に春日原始林で幼鳥を2羽確認した。確認した以外にも複数いると思われた。これより、オオルリは繁殖していると考えられる。春日原始林の特徴は、オオルリの好む高い木が生え、沢もあり、それなりに虫もいること。そして、今年の6月25日にもオオルリの成鳥を確認できていることから、継続的に繁殖地として利用されていると考えられる。

〈コマドリとミソサザイ〉

私は8月25日に大台ヶ原に行った。大台ヶ原では、コマドリとミソサザイが繁殖していて、別名コマドリ山と呼ばれている。残念ながら時期が遅くてミソサザイしか見れなかったが来年にも行きたいと思う。

第4節 越冬地への渡り

今年は地球温暖化の影響からか昨年より渡りが早いと考えられる。根拠は、例年では9月の下旬から10月の中旬に越冬地に渡るコサメビタキを8月15日に馬見丘陵公園で確認したことだ。コサメビタキは馬見丘陵公園では繁殖していないと思われるため、越冬地に渡る途中に立ち寄ったと考えられる。

また、9月4日、9日、11日、14日に奈良学園でコサメビタキとエゾビタキ、サメビタキらしき鳥を確認した。奈良学園ではほとんど見かけることのない鳥であるため、時期的に渡る途中で立ち寄ったと考えられる。

第5節 第2章のまとめ

第3節で紹介したキビタキ、サンコウチョウ、アオバズクについて、奈良県で繁殖が確認された理由としては、その鳥にあった生息環境が整っていることと渡りルート上にあるまたは繁殖地として認知されていることだと考えた。そして、3種のうち生息環境が少し異なるアオバズクについても同様のことが言えることから、奈良県には豊富な自然環境が揃っていると考えられる。これより、私は夏鳥が奈良県に来る理由は大きく2つの要素

(ア) 奈良県には豊富な自然環境があること。

(イ) 奈良県は夏鳥の渡りやすい位置にあり、長年の間、繁殖している場所があるということ。

第3章 冬鳥・漂鳥について

第1節 冬鳥・漂鳥とは

夏は北の地で繁殖をして、冬を越すために日本に渡る鳥のことである。また漂鳥は、日本国内を季節移動する鳥のことである。

第2節 どうやって奈良に来るのか

・奈良県に渡る冬鳥について



図 1

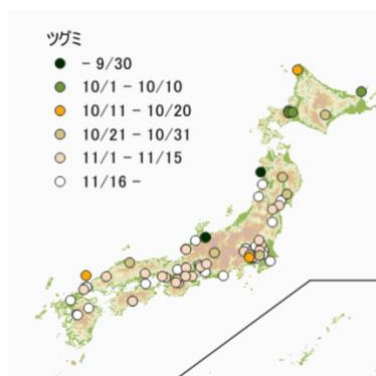


図 2

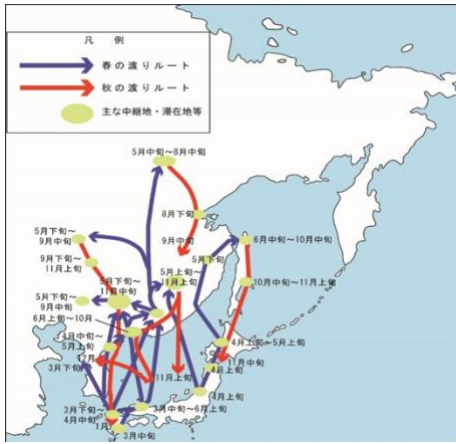


図3 (マガモ)



図5



図4 (ヒドリガモ)

こちらの図1、図2はバードリサーチ季節前線ウォッチ 2024 から引用した図です。濃い点が日本で早い時期から見られた地点を示している。ジョウビタキはチベットから中国東北部、ロシア南東部から渡ってくるため北海道や九州に渡り始めるが、近年、日本で繁殖が確認され始めているため少し異なっている。ツグミはジョウビタキより渡りが遅く、シベリアから渡ってきているため、例年では始めに北海道に記録がついている。しかし、地球温暖化の影響もあってか、初認は富山県と秋田県となっている。

図3と図4は、マガモとヒドリガモの飛来経路の図である。また、図5は、ハクチョウ・ガンの飛来経路の図である。これらは2024年の渡りの図ではないが、ガン以外は奈良県で見られた記録のある鳥である。

図1～図5より、私は冬鳥の渡りルートは大きく2つに分けることができると考えた。ジョウビタキとカモ類のように北海道と九州に初認が確認され、日本各地に渡る場合とツグミやハクチョウのように北海道から徐々に日本各地に渡る場合である。地球温暖化によって変わる可能性はあるが、これを参考にしたいと思う。

・奈良県に来る漂鳥について

第3節で書く予定の漂鳥について少し説明しようと思う。

最初にルリビタキについて説明する。ルリビタキは夏、標高の高い地域で繁殖し、冬には平地に降りてくる鳥である。そこで私は、冬に奈良盆地にいるルリビタキはどこで夏を過ごすのか推測を立て調べてみた。調べた結果、奈良県にある大台ヶ原、大峰山、吉野熊野国立公園辺りではないかと考えられた。また、熊野古道と大阪にあるルリビタキの丘も十分可能性は秘めていると考えられる。

次にアオジについて説明する。アオジは夏は北海道で繁殖し、冬は平地の藪などで過ごす。繁殖期には冬とは違って、高い木のとっぺんで囀る姿が見れるらしいので将来見ることができたら嬉しい。

最後に第3節で書く予定はない漂鳥について少し触れておこうと思う。ウグイスやモズ、ホオジロなどの鳥は、留鳥または漂鳥と図鑑に記載されている。日本国内を季節に応じて移動するらしいが、私は奈良県でウグイスとホオジロに関して、1年中見れているため、あまり漂鳥と認識はしていない。移動しているかもしれないけれど、それを調べるためにはGPSなどを使わないとできないと思われる。よって、第3節では除外させてもらう。

第3節 冬鳥と漂鳥の生活

・ヒタキ科

<ジョウビタキとルリビタキ>



分類：スズメ目ヒタキ科ジョウビタキ属

全長：14cm

分布：冬鳥、ほぼ全国。

生態：市街地や公園など。比較的どこにでもいる。冬はオスメス関係なく縄張りを持ち、渡来後の1ヶ月は頻繁に争う。縄張り意識が強いあまり鏡に映った自分の姿をて敵と勘違いし攻撃したりする。昆虫やミミ

ズ類、クモ類または木の実なども食べる。



オス

分類：スズメ目ヒタキ科ルリビタキ属

全長：14cm

分布：漂鳥、ほぼ全国。

生態：非繁殖期は平地から山地の林、樹木が多い公園などに生息。オスのルリビタキが青色になるためには3年かかる。また、縄張り争いでは、色が違う同士より同じ色同士の方が激しい争いとなる。昆虫やミミズ類、クモ類などを食べる。

(ジョウビタキの生活)

奈良学園では今季初のジョウビタキを10月26日に確認した。ジョウビタキは始めは森の教室の入り口付近にオスとメス両方確認できていたが、その後オスの姿は確認できていないため、メスが縄張りを確保したと私は考える。また、井戸の奥の湿地付近にもメスを確認している。私は、奈良学園に2羽のメスがいることを確認した。しかし、2羽以上いる可能性は大きい。

生活の様子についての推測を述べる。奈良学園には多くの昆虫やミミズ類、クモ類がいることは部活動の中で確認できたが、確認したのは夏であり、それらがどのくらい減っているかは分からない。木の実に関しては調べたところ、ソヨゴ、カナメモチ、ヤマハゼ、クスノキ、カキなどが生えている。ヤマハゼを鳥が食べている様子を見たことがあるため、食べている可能性はあると思う。また、見晴らしの良い場所で縄張り宣言をするメスの様子を確認したことから、食には困っていないと推察できる。

(ルリビタキの生活)

奈良学園では今季初のルリビタキを11月13日に確認した。その個体は若いオスかメスが井戸の奥付近で見た。去年は井戸の横で若いオスかメスが2羽いるのを見たが、おそらく争っている最中だったと思う。1月28日時点では、オスの成長が教室の近くに縄張りを

構えたことによってほぼ毎日見ることができるようになった。しかし、昨年と比べ、見る時期が遅くなったのは、昨年よりも周辺にアオジが多くいたことが原因だろうか。

過去にオスの成鳥は、中学1年生の頃は井戸付近で、中学2年生の頃は棚田で確認した。今年は12月10日の午前10時～11時頃に蛍広場と1月22日の午後4時半頃に棚田で確認した。様子としては、低めの木に止まっていて、時折地面に降りては戻るを繰り返す行動を行っていた。おそらく食事をしているのだろう。実際に棚田で見る個体がミミズを食べているのを確認した。他にも昆虫類やクモ類などを食べていると考えられる。

(ジョウビタキとルリビタキ)

両者は生息環境や行動がよく似ている。そのため、ジョウビタキとルリビタキで縄張り争いが起こることがある。実際に私も馬見丘陵公園でジョウビタキのメスに追われるルリビタキのオスを見たことがある。力関係では順にジョウビタキのオス、メス、ルリビタキのオスとなっているため、生活環境はジョウビタキの方が良いのかも知れないと考える。

これより私は、ジョウビタキとルリビタキが奈良県に来る理由は大きく2つの要素

- ① 昆虫やミミズ類、クモ類または木の実が豊富にあり、食には困らないこと。
- ② 奈良盆地の近くに標高の高い山があること。

だと考える。

<ニシオジロビタキ>



分類：スズメ目ヒタキ科キビタキ属

全長：11～12cm

分布：旅鳥または冬鳥。

生態：平地から山地の落葉広葉樹林に生息。飛びながら獲物を捕まえること（フライングキャッチ）をして昆虫類やクモ類を食べる。秋には木の実も食べる。オジロビタキと行動も姿もよく似ている。違いは、尾羽や下嘴の色である。

※ニシオジロビタキは「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥類学会）では検討種とされるが、別種と考える。

（生活）

私は、12月13日に馬見丘陵公園にニシオジロビタキのメスを見に行った。11月にはすでに入っていて、4年ぶりとなるらしい。現時点では、関西では馬見丘陵公園と兵庫県芦屋市の2ヶ所にしかいない珍しい鳥である。確認した際の様子、地面に降りたり戻ったりを繰り返す狩りを行っていた。

私はニシオジロビタキが奈良県に来た理由は大きく2つの要素

- ① 関西に2ヶ所しか入っていないということから、数少ないニシオジロビタキにとっての生息環境がかなり整っている。
- ② 4年ぶりに来たということから、渡りやすい位置にあるということ。

だと考える。

<ツグミ>



分類：スズメ目ヒタキ科ツグミ属

全長：24cm

分布：冬鳥、全国に記録がある。

生態：平地から山地の林、農耕地や芝地、公園などに生息。群れで渡来し、徐々に1羽となる個体が多い。そして、春には再び群れとなる。ミミズ類などを食べる。

(生活)

昨年の12月23日に奈良学園で20匹以上のツグミの群れを確認した。1月28日時点では周辺で確認することができたが、敷地内ではまだ見れていない状況である。一方馬見丘陵公園では、11月23日に今季初確認をした。その時見た個体は1羽だけであったが、12月23日には4、5羽確認した。12月23日に確認した際はどの個体も地面にいて、私の予想ではミミズを探していたと思う。

私はツグミが奈良県に来る理由は大きく2つの要素

- ① 昨年20羽以上の群れを確認したことから、北海道からの南下ルート上に奈良県は位置しているから。
- ② ミミズを探しやすい地面があるなどといった生息環境が整っていること。

だと考える。

・ホオジロ科

〈アオジ〉



分類：スズメ目ホオジロ科ホオジロ属

全長：約16cm

分布：漂鳥、ほぼ全国。

生態：平地から山地の竹藪などの茂みに生息。繁殖期以外は小群で行動し、種子や昆虫、クモ類などを食べる。

(生活)

11月9日に奈良学園で今季初確認した。敷地内では主に、棚田付近と井戸の奥付近でよく見かける。どちらの場所でも約3羽見かけることから、それらはその場所で群れを作って生活していると考えられる。また、地面を突きながら歩く行動も確認できた。食事をしていると思われる。周辺にはヤマハゼのなどの鳥が食べる実も生えており、食事面は問題

ないと考えられる。

私は昨年 비해、見る回数はかなり多いように感じる。ネット上でも各地に「アオジが多い」という書き込み少し見られた。地球温暖化が影響しているのだろうか。実際のところは不明である。

私はアオジが奈良県に来る理由は3つの要素

- ① 繁殖している場所から越冬しやすい場所に奈良県は位置するから。
- ② アオジが食べそうな種子があり、生息環境が整っていること。
- ③ 可能性としては低い地球温暖化の影響。

だと考える。

・カモ科

ここではカモ科の中からピックアップして述べるのではなく、カモ科全体としてまとめて述べたいと思う。

私はカモ科の観察は、馬見丘陵公園だけではなく、普段私が乗る電車やバスで通り過ぎる池を見て観察する。正直、電車やバスが池を通り過ぎるのは早く、池にいるカモの判別すらままならないこともあるが、毎日見ていることによって、ある程度は把握できた。その結果を下記で述べる。

(生活)

今季、普段見る池では、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ホシハジロ、ハシビロガモ、マガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモの順に確認した。それらの鳥は、水上や陸上で寝ていたり、群れを作り過ごす姿を多く見た。

また、ハシビロガモに関しては、複数の個体が集まり水上を回転する行動が見られた。調べると、回ることによって水中に渦を発生させ、水底に沈むプランクトンを浮き上がらせ食べるためだった。今まで私は、カモが水上を回る行動はハシビロガモ以外もすると思っていたため、これには驚かされた。

私はカモ科の鳥が奈良県に来る理由は大きく2つの要素

- ① 渡りルート上に奈良県が位置しているから。
- ② 奈良県にはため池が多く、生活環境が整っているから。

だと考える。



ハシビロガモが水上を回転する様子



ホシハジロのメス



ヨシガモのオス

第4節 第3章のまとめ

第3節から奈良県にはたくさんの種類の鳥が来ていることから、その鳥に合った生息環境が整っている、つまり、豊富な自然環境が奈良県にはあるということが分かった。また、ニシオジロビタキとツグミから渡りルート上に位置していることも確認できた。そして、ルリビタキについても奈良盆地の近くにある標高の高い山から降りてくると推測できる。これより、奈良県に冬鳥・漂鳥が来る理由は大きく2つの要素

- ① 奈良県には豊富な自然環境があること。
- ② 奈良県は冬鳥が渡りやすい位置にあり、漂鳥が来やすい地形をしているということ。

だと考える。

第4章 まとめ

第2章と第3章から私は、「奈良県に来る渡り鳥や漂鳥はなぜ奈良に来るのか」という問いの答えは大きく2つの要素

- ① 奈良県には森や川、池などの豊富な自然環境が整っていること。
- ② 奈良県は渡り鳥や漂鳥が渡りやすい位置かつ地形をしていて、長年、夏鳥が繁殖しているということ。

だと考える。

おわりに

私はこの課題研究ジュニアを通して、今までは表層しか知らなかった鳥の現状を深く知ることができたように思えた。中学1年生の時から始めたバードウォッチング。かなりの回数、鳥を観察して、写真を撮ってきたということもあって、知らず知らずのうちに知っているように思われたけれど、まだまだ知らない世界が広がっていることを改めて実感した。最近、たまに鳥の図鑑を開くくらいの頻度になってしまったけれど、より奥を知るために図鑑や論文のページを開いてみたい。

参考文献

- ・叶内拓哉『フィールド図鑑日本の野鳥第2版』、文一総合出版、2020年
- ・くますけ『エナガの重さはワンコイン 身近な鳥の魅力発見事典』、山と溪谷社、2023年
- ・BIRDER 編集部『BIRDER SPECIAL ジョウビタキ・ルリビタキ・オジロビタキ』
文一総合出版、2021年
- ・バードリサーチ『季節前線ウォッチ』<https://www.bird-research.jp> > kisetu
- ・環境省 <https://www.env.go.jp> > bird_flu > wataridori_hiraikeiro
- ・famille www3.famille.ne.jp